

国際協力特別賞

「排除」ではなく「寛容」を

長崎県立長崎東中学校 2年

秋山 琴美

世界の幸せ、すなわち世界中の全ての人々が幸せになるためには「寛容」が大事である。「寛容」のモデルは、私が住む長崎のまちの歴史の中にある。

長崎は、江戸の鎖国時代、海外に開かれた唯一の窓口であった。その二百年の歴史の中で西洋と中国、日本の人々が交流し、調和を保っていた。何一つ争いが無かったことは、特筆すべき真実である。私はその背景に長崎人が持つ「寛容さ」があったのだと思う。

また、長崎には「原爆」という悲しい歴史もある。しかし、その悲しみや苦しみを長崎人は祈るという寛容さで乗り越えた。恨むという「憎しみ」ではなく、祈ることで惨状を受け入れたのである。

私は長崎人である。私の中にも、先祖から受け継いだ寛容さがあると信じている。

私が小学校三年生の時、Sちゃんという女の子がクラスメイトからいじめを受けていた。Sちゃんと私は小学校に入学してから二年間同じクラスだった。Sちゃんはおしゃべり好きで、明るい性格だった。Sちゃんが私の家に来て二人で楽しく遊んだことを、私は今でも鮮明に覚えている。

Sちゃんへのいじめが始まったのは三年生の時。クラスの一部の女子が仲間はずしにしたことがきっかけだった。私の家で開催するハロウィンパーティーに、私はあえてSちゃんを誘うことにした。周りの友達も、Sちゃんは「気持ち悪いから」「すぐ怒るから」という理由で誘うことに反対した。しかし、「気持ち悪いから」というのは反対する理由にはならない。短気」という短所以上にSちゃんには長所がたくさんある。私にとってSちゃんは大切な友達のひとりである。私はSちゃんを招待したことを誇りに思っている。

高学年になり、Sちゃんへのいじめは男子が加わったことでエスカレートしていった。六年生になって再び私たちは同じクラスになった。明るい性格だったSちゃんは、まるで別人のように目立たない存在になっていた。私は、「そばにいてあげよう」と心に誓った。私がそばにいても、できることは何もないのかもしれない。それでも、そばにいて、少しでも安心できたら、笑顔を見せてくれたら、私はそう思ってそばにいた。

「いつも話しかけてくれてありがとう。」

Sちゃんが、卒業アルバムに書いてくれた私あてのメッセージである。

「微力だけど、無力じゃない」

高校生平和大使のスローガンであるが、私の力も同じだと感じている。相手を受け入れる寛容さをもって行動することで、何かが変わると思う。大きな変化ではなくても、人を支える少しの勇気になると信じている。世界中の全ての人が「寛容さ」をもって接することができれば、人は必ず幸せになれる。